

MIW通信 51

MIW（ミュウ）は、千代田区男女共同参画センターの愛称です。公募で区民から寄せられました。
MIはman（男性）、WIはwoman（女性）、Iはintercommunication（情報や意見交換）の頭文字です。

2022

MIW マスコット
キャラクター
みゅうじろう



左上『千代田区女性史（1996～2020）』シンポジウムの登壇者。右上 岩波ホールに貼られた上映された映画のチラシ。左下 ブックカフェ・チェッコリの店内。下中 はらだたけひでさん（元岩波ホール企画・広報担当）。右下 右から、はらだたけひでさん、川喜多かしこさん、岩波ホール総支配人高野悦子さん。1974年頃



◇特集 1

千代田区女性史（1996～2020）発刊

過去・現在・未来の女性たちへのエール

シンポジウム「聞き書きから見る多様な女性たち」…p2

聞き書きの可能性 編集委員 座談会 …p4

◇特集 2

本のまちで、映画のまちで 繋がるボタン

ありがとう岩波ホール …p6

韓国と日本の懸け橋 ブックカフェ・チェッコリ …p8

過去・現在・未来の 女性たちへのエール



シンポジウム「聞き書きから見る多様な女性たち」

今年（令和4年）5月、『千代田区女性史（1996～2020）』（以下『女性史』）が完成し、6月23日に、発刊記念シンポジウムが開かれました。本書は、22年前に刊行された『千代田区女性史』（第1巻～3巻）の続編にあたり、前著発刊からの25年を概観した解説、千代田区で生まれ、立ち、学び、働く42名のオールラウンドストーリーや年表等を掲載しています。シンポジウム当日は女性史企画委員会委員・編集委員の方々が、この『女性史』の意味、聞き書きに参加しての発見等を話されました。参加者50名の2割は男性で、皆さん熱心に聞き入っていました。



6月23日、『千代田区女性史（1996～2020）』の発刊記念シンポジウム「聞き書きから見る多様な女性たち」の様子。会場はかがやきプラザ。コロナ禍で感染対策を講じながら対面で実施。

『千代田区女性史』について

◆第1巻～3巻 甦る130年の女たち
千代田区の地域の特性を活かし、女性の視点であたりまえの女の暮らしが生きたと伝わるような女性史―『千代田区女性史』（第1巻～3巻）が刊行されたのは、2000年4月でした。1・2巻は幕末から大正デモクラシーを経て、昭和から1995年までの通史、第3巻は87人の女性の聞き書き集でした。地域史では異例の130年の年表と147人の「千代田区ゆかりの女性たち」のリストも掲載されました。編纂したのは、一般公募による編集委員25名と専門家の江刺昭子さん、山辺恵己子さんでした。当時、作家の林望さんは「役所の編纂する〇〇史は面白くないものが多い。しかし、『千代田区女性史』はまことに喜ばしい例外である」と書いて下さいました（『M-W通信』7号）。

◆2022年春、続編完成

前著発刊からの25年を概観した解説や、千代田区で暮らし、働き、活動した20代から90代までの42名の女性たちが登場しています。議員、医者、写真家、大企業で働く方、障害を抱える方、地域活動に携わる方等。しかし、いわゆる「活躍」する方ばかりでなく、暮らし働くなかでの葛藤や悩みにも光を当て、千代田区の女性の多様性が表れているのが今回の女性史の特徴となっています。6名の企画委員と一般公募の編集委員21名の手により完成しました。

前著『千代田区女性史』から 続編発刊までの歩み



『千代田区女性史』全3巻発刊から22年目の今年、続編が完成しました。その間、初回の編纂に関わった方々は「千代田区女性史サークル」を作り、MIWの登録団体にもなられて、地道に女性たちの聞き書きを続け、5冊の『時代を駆ける』（上記写真）をまとめています。その後、区民の有志から続編の希望が出され、区も発刊に動き出しました。22年前に蒔かれた女性史発掘の種は、確実に根付き、再び花開きました。千代田区の女性たちのボトムアップの力があってこそその続編の労作です。

千代田区の女性の多様性

シンポジウムでは、まず、三浦まり企画委員長から「女性を取り巻く社会状況の激変下、千代田区の女性の多様性を出したいと思った。活躍した女性たちばかりでなく、千代田区で生き、働き、活動する等身大の女性たちに光を当てた。『女性史』を通して読み手が自分の生き方を顧みてもらえたら意義がある」と企画・



三浦まりさん

企画委員会委員長・上智大学教授
今回の『女性史』の特徴は、「25年の変化の記録」「市井の女性たちが暮らし生きる中で葛藤や悩みを取り上げた」とのこと。

編纂の意図が話されました。

次に、大橋由香子企画委員・編集委員リーダーからは「法律・制度・社会の動きに呼応した女性たちの生き方を記録することで、差別や偏見や暴力を許さず、誰も取り残さない社会への思いが反映されていく」と編集への思いが語られました。

前回の『女性史』編纂にもご協力頂いた江刺昭子さんか



大橋由香子さん
企画委員・編集委員リーダー、フリーライター・編集者

らは「一時期、行政の女性史編纂がブームになったが、その後を追った女性史は少ない。今回の刊行は、歴史と現代を交錯させ今日の意味がある」との言葉を頂きました。

「聞き書き」の縁に導かれて

編集委員からは聞き書きの感想も語られました。北島敦子さんが聞き書きしたのは、激変する神田の街の暮らしの中で自分を持ち続けた昭和2年生まれ荒波智子さん、不自由な目で二人の娘を育て地域の障害者ネットワーク活動に取り組み佐々木貞子さん、



江刺昭子さん

企画委員、女性史研究者

オリンピックを目指し記録に挑み続けた水野智佳子さん。「にわか記者になったようで、自分の視野が広がり、世界を見る目が変わりました」。



深野恵津子さん 編集委員

法政大学総長を務めた江戸文化研究者の田中優子さんと、かかりつけ医として地域に貢献した常喜眞理さんを聞き書きした深野恵津子さんは「伺った方たちのぶれない力、困難や葛藤とも忍耐強く折り合う力を感じました」と話されました。参加者からは「女性史には聞き手にも語り手にも意味がある。女性史の力を感じた」「社会を支えた市井の女性たちの息づかいも、女性史には欠かせないことに気付かされた」との感想も頂きました。多くの方々に、ぜひ、この『女性史』を手にとって頂けたらと思います。



北島敦子さん 編集委員

聞き書きの可能性 編集委員 座談会

今回発刊した『千代田区女性史（1996～2020）』は、女性史といっても現代に至る25年を中心に女性たちの足跡を記録した現代史です。その足跡を記録したのは公募で選ばれた21名の編集委員の方々でした。在住・在勤・在学の、10代から70代まで、教員や看護師、退職後に関わった方など、年代も職業も様々でした。参加された田茂山史恵さんと樋口万季さんにお話を伺いました。

『千代田区女性史』に関する展示 MIW 交流サロンで



編集委員のお二人 田茂山史恵さん（左）と樋口万季さん（右）

参加動機と伺った方々

田茂山 現在は大学生ですが、編集委員になった当時は高校生でした。以前、千代田区国際平和事業のドイツ・ポーランド派遣に参加したことがあり、その時のご縁で、編集委員募集を知って応募しました。お話を伺ったのは、千代田区議会議長も務めた松本佳子さんと、大学時代に災害救援ボランティアを経験し警察官になった中田千聖さんです。聞くのも書くのも初めての経験で、参加していなかったら出会うことのなかった方々のお話が伺え貴重な経験でした。

樋口 私は区内の図書館に勤めている司書です。図書館では千代田区に関する本に触れているのに、地域のことを知らないと思います。応募しました。私は、94歳の写真家の小川ゆきよさんと自らも障害を持ちながら区の障害者共助会会長を務めてきた星野絹子さんに伺いました。お二人とも全くな年を感じさせない、それどころか、その生き方に多くのエネルギーを頂きました。

印象に残ったお話

田茂山 松本さんは、初めて

区議会議長になった女性とのことでどんな方かと思つたら、議員になったきっかけは、地元の親しい区議会の人たちに「佳子ちゃん、一回、議員になつてみたらどうだ」と言われたからと伺つて、とてもびっくりしました。でも、その後、女性議員が少ない中、地元の人たちの世話役として頼りにされ、18年間、自分の声を上げ続けてきたこと、何が悩んでいる女性たちのためになるかを考え行動してきたというお話が印象的でした。

樋口 70代からカメラを始め、93歳で銀座で個展を開いた小川さんに圧倒されました。小川さんは、群馬の米屋に生まれ、神田の金箔印刷業の夫と共に家業を支え、夫を亡くしてから本格的にカメラを手にし、地元の街を撮り続けています。次の個展に向かう姿に出会えたことがとても貴重です。

聞き書きを経験して

田茂山 災害救援ボランティア活動をしていた頃の中田さんとは同年代で、実際に行動

『千代田区女性史』続編に 登場する42名の女性たち

- ◆空襲の焼け野原から、産婦人科医の世界で開拓者に 堀口雅子さん
- ◆憧れの東京に嫁いで ～人も社会も変わりゆくこの街で～ 荒波智子さん
- ◆94歳の写真家、都会を撮る 小川ゆきよさん
- ◆400年続く商人の魂 ～人への気持ち、優しさを引き継いで～ 長谷川万里子さん
- ◆生まれ育った神田で、経理の仕事をやリ通して 村田佐知子さん
- ◆「人生って面白い」障害とともに、自ら道を拓く 星野絹子さん
- ◆子ども時代の苦労をともにした家族の介護から福祉に関わる 宮嘉代子さん
- ◆伝統を大切にしながら、時代と日本人に合う味作りを 山本道子さん
- ◆災害対策にも女性の視点を ～防災意識の輪を足もとの地域から～ 増山みさほさん
- ◆これまでの経験がすべて今につながっています 香取章子さん
- ◆多文化共生～華僑教育と文化を受け継いで 陳櫻芳さん
- ◆私らしさを貫いて次世代につなぐ 藤原房子さん
- ◆神田で生まれ育って区議会議員に 松本佳子さん
- ◆障がいをもつ子どもの現在と未来を考え続けて 蒲生好永さん
- ◆多様性社会を尊重し、自由を生き抜くには ～女性の変遷を大学教員・総長の立場から見る～ 田中優子さん
- ◆「ガラスの天井」突き破るのは自分 加納尚美さん
- ◆保育の質の向上を願って ～すべての子どもたちのために～ 大森千珠子さん
- ◆「愛情教育」を継承して 山崎良子さん
- ◆自分らしく職業人生を全うし、女性の課題に向き合う 村木厚子さん
- ◆千代田の魅力を発信するコミュニケーターとして 川村真美江さん
- ◆昔の女たちに魅了され、復刻版にして知らせる喜び 山本有紀乃さん
- ◆地域のかかりつけ医を目指して 常喜真理さん
- ◆女性の政治参画を応援して 三浦まりさん
- ◆喜びや悲しみを噛みしめる時間を大切に、本と関わる 金承福さん
- ◆伝統ある皇室を護り、弓の道を極める 根本百合子さん
- ◆江戸総鎮守 神田明神に吹く新しい風 齊藤美姫子さん
- ◆「桜が咲いたら千鳥ヶ淵」を合言葉に、ごみ問題と環境保全に取り組む 窪田憲子さん
- ◆地域のご縁に支えられ、子どもたちの日常を見守りたい 谷真理子さん
- ◆初神輿は18歳、いまでも変わらず江戸っ子の血がさわぐ 長岡美恵子さん
- ◆地域に寄り添いながら、行政との橋渡し役として 小田島真理子さん
- ◆特別ではない、目が見えない人生 佐々木貞子さん
- ◆記録に挑み続けてオリンピックへ 水野智佳子さん
- ◆日本社会と女性のライフスタイルを研究 ～ドイツから来日してみた東京の暮らし～ バーバラ・ホルツスさん
- ◆安全な運転は私のプライド 横田京子さん
- ◆保健師・看護師の資格を活かし地域高齢者の生活を支える 川島典子さん
- ◆神田の人に支えられて、女性も輝ける神田祭を後世に 上原和加さん
- ◆LGBTsへの差別をなくし、誰もが生きやすい社会を目指して 五十嵐ゆりさん
- ◆人が好き～バトンの指導者として地域の子どもたちと関わる 大屋薫さん
- ◆お客さんの温かい心と言葉に支えられて 張迎芬さん
- ◆男性プロデュースではない、自分たちのかわいさを発信するカルチャーを 福嶋麻衣子さん
- ◆経験を生かして親子の就学準備を支援 ～母親の一人として地域で子育てを楽しみたい～ 村上沙織さん
- ◆学生ボランティアの原点は東日本大震災の被災地への訪問 中田千聖さん

する姿に刺激を受けました。聞き書きを通して、性別に関わらず平等に評価される難しさを知りましたが、それに対応するお二人の内面のしなやかな強さも感じました。

樋口 星野絹子さんの聞き書きの取材がご縁で、障害者福祉センターの利用者の方等の作品を勤め先の図書館に飾ることができました（P5下記）。この聞き書きに参加したことで、地域に繋がる新たな可能性があることを知り、今後活かしていけたらと思います。

◆ 聞き書きからの縁がSDGsの展示会に ◆

女性史の聞き書きでできた縁は、思いもよらぬ展開をみせました。障害者共助会会長の星野絹子さんへの聞き書きを機に、樋口さんは区内の障害者福祉センターえみふるを知ります。その後、2021年4月にECOM駿河台で開かれた「プラスチックアート作品展」に参加し、えみふるの利用者や地域の子どもたちのプラスチックごみを工夫したアート作品に出会います。樋口さんはこの作品をぜひ、多くの人に知ってほしいと思いました。そしてその思いは、ご自身が勤める日比谷図書文化館の「アートでSDGs 日比谷の森で考えるプラスチックと地球環境～いま、できることから～」(2021年6月22日～9月6日)に繋がりました。

地域の仲間たちが作った《プラスチックアート》をきっかけに、海洋プラスチックごみ問題や地球環境について考えた日比谷図書文化館の展示。「区内で働いていてもその存在を知らなかったえみふるさん、星野さんとの出会いがこんな展開になるとは」と、樋口さんはうれしそうに話してくれました。

日比谷図書文化館の「アートでSDGs」展に飾られたえみふるの皆さんのプラスチックアート作品



日比谷図書文化館の「アートでSDGs」展を訪れた星野絹子さん(右の車椅子の方)と樋口万季さん(左端)

本のまちで、映画のまちで 繋がるボタン

ありがとう岩波ホール

今年7月29日、神保町でミニシアターの草分けとして映画文化の中心的存在だった岩波ホールが閉館しました。岩波ホールは、ここでしか見られないアジア・アフリカの映画、女性映画監督や女性の生き方をテーマにした映画を上映してきました。MIWでもこれまでに、岩波ホールの映画ポスターの展示、試写室での交流会にご協力頂きました。3年前まで長年、同ホールの企画・広報を担当してこられた、はらだたけひでさんに、映画、岩波ホールへの思いを伺いました。



閉館前最後の上映作品のポスター「歩いて見た世界 ブルース・チャトウィンの足跡」。



はらだたけひでさん。「岩波ホール」の企画・広報を担当し、岩波ホールの活動を2019年2月まで長く担い続けてきた一人。退職後の現在は、「ジョージア映画祭2022」を企画するなど、ジョージアの文化の普及に努めている。画家、絵本作家として『パシュラル先生』で産経児童出版文化賞入賞。『フランチェスコ』でユニセフ・エズラ・ジャック・キーツ国際絵本画家最優秀賞を日本人で初めて受賞している。

閉館になるにあたって

岩波ホールが突然無くなり、自分の足元が崩れ落ちたような思いがしています。非常にやるせなくて無念です。

1974年に働き始めた頃は、それまで紹介されてこなかったアジア、アフリカ、欧米の名作を上映し、ミニシアターの礎を築いていた時期でした。その中心にいたのが総支配人の高野悦子です。

その後、1985年のカネボウ東京国際女性映画週間の開催後、女性監督の作品を積極的に上映するようになりました。僕が最初に魅せられたのがドイツのヘルマ・サンダー・スルブラームス監督の「ドイツ・青ざめた母」*。「森のなかの淑女たち」のシンシア・スコット監督、アニエス・ヴァ

ルダ監督も忘れ難いです。

今では特段、女性監督が：

とは言いませんが、僕は女性監督の作品から、男性には真似のできない感性、触感を感じます。ゲーテは「永遠の女性的なるものが人々を上に導く」と言ったそうですが、彼女たちの世界は僕にとって豊かな「未知の森」であり、上映に携わることにより、自分が高められたと思っています。

ジョージア映画に出会って

1978年の秋に、ジョージア（当時グルジア）のギオルギ・シエンゲラヤ監督の映画「ピロスマニ」*の公開を任せました。その出会いによって人生が

変わり、岩波ホールへの想いも深まりました。

高野には当時わずか24歳の僕に、1本の作品を任せるとい

岩波ホールで上映された動員ベスト3作品

1 宋家の三姉妹

（監督：メイベル・チャン、制作：香港／日本）
中国近現代史に関わった宋家の三姉妹の生き様を描いた作品。

2 山の郵便配達

（監督：フォ・ジェンチイ、制作：中国）
中国の山岳地域に手紙を届けてきた郵便配達人の、後を継ぐ息子との最後の配達を描く。

3 八月の鯨

（監督：リンゼイ・アンダーソン、制作：アメリカ）
小さな島の別荘で夏を過ごす老姉妹と、彼女たちを取り巻く3人の老人たちが織り成す人間模様。

女性の生き方や日本では知られていない国や民族の問題を描いた作品がロングランされ、人気があった。

*戦争に行った夫と、残された妻が戦争が終わっても互いに傷つき、その傷を分かり合えず分断が深まっていく作品。

**ジョージアの独学による天才画家、ニコ・ピロスマニの半生を描いた映画。ジョージアの風土、歴史、民族の魂も込められた作品。

う度量がありました。男社会の映画界の中で、闘う女性であり、非戦を貫き、岩波の文化と自身の主張を重んじる人で、感謝しています。

映画が育つ、映画は生き物

岩波ホールは本と芸術の街、神保町に育まれて、独自の主張をしてきました。

映画で世の中を変えられないとわかってはいても、僕はいつも、この映画で世界を変えられるかも知れないという夢を抱いていました。

今はスマホで映画を見る時代。文字情報だけで満足する人も増え、映画はこの変化に

順応できなければ製作資金が集まらず、商業主義のなかで退化しつづけます。しかしこの状況に対し、抗い続ける場がなければなりません。

岩波ホールは僕にとって「生きた」場でした。映画も生き物です。映画は暗闇でスクリーンに投影されることによって真の生命を得るのです。今日の社会で暗闇や影はないがしろにされますが、実は人間には不可欠なものと考えています。その意味でも、岩波ホールは閉館しましたが、映画館や劇場の存在はこれからも不滅だと信じています。



岩波ホールに入社したころのはらださん（右端）。左から2人目が総支配人の高野悦子さん（故人）、3人目が映画文化活動家の川喜多かしこさん（故人）



数年前から、岩波ホールの壁には、過去に上映された作品のチラシがびっしりと貼られました。



MIW との関わり



岩波ホールの試写室での羽田澄子監督との交流会「ともに輝く人生を生きる 映画の中の女と男、そして私たち」の様子。2007年6月



当時岩波ホールで上映されていた羽田澄子監督の映画のチラシ

岩波ホールとMIW

試写室での交流会とポスター展

これまでMIWは岩波ホールにご協力頂き、様々なイベントを実施してきました。2007年6月には、岩波ホールの試写室をお借りして、羽田澄子監督との交流会「ともに輝く人生を生きる 映画の中の女と男、そして私たち」を開きました。ちょうどこの時、岩波ホールで上映されていたのが、羽田監督の映画「終りよければすべてよし」。誰もが安心して老い、その人らしく生き切るための在宅医療・終末医療についてのドキュメンタリーでした。試写室で映画について直に監督と交流できたこの会は、とても臨場感がありました。また、この年の男女共同参画週間には、千代田区役所の区民ホールで、岩波ホールの上映ポスター、監督・俳優の貴重なサイン等を展示しました。6日間の来場者は1356人で、男性が女性の1.4倍でした。多くの方にご覧頂きました。「とても懐かしい」とポスターの前で映画を語り合っていた方々を思い出します。岩波ホールの皆さん、本当にありがとうございました。



岩波ホールから上映ポスターを借用して実施したMIWの男女共同参画週間の「ポスター展」。2007年6月

韓国と日本の懸け橋 ブックカフェ・チェッコリ

神保町といえば、書店街。およそ 200 店もの古書店が建ち並びます。古くからの書店だけでなく、美術、洋書、料理、児童書など一つのジャンルの本を専門に扱う店、本の販売だけでなく、カフェを併設しながら、新たな形で展開している本屋さんなど様々です。韓国語原書書籍や翻訳本の販売、イベントを実施するブックカフェ・チェッコリについて、スタッフの佐々木静代さんにお話を伺いました。



チェッコリ店内の本棚には、韓国語の本と日本語の本が並べられています。



宣伝広報担当の佐々木静代さん。最初、韓国文学はなじみが薄かったけれど、店主の金と出会うきっかけとなった『楽器たちの図書館』（キム・ジュンヒョク著、波田野節子・吉原育子訳）を読み、いつしか韓国文学にもはまっていたとのこと。

ブックカフェ「チェッコリ」とは

「韓国と本で繋がる」をキーワードに、様々な情報を発信しています。2015年、出版社クオンの代表で店主の金承福（キム・スンボク P9*）が、本好きの人たちが集まる神保町で、韓国書籍の出版をしながらブックカフェを始めました。店内には、韓国語の小説や詩、エッセイ、絵本、コミック、料理本、人文書、美術関連書に加え、日本語に翻訳された本など、

ど、合わせて約4千冊が並んでいます。

現在はオンラインですが、韓国から作者を呼んでのイベントや、韓国の現地と結んでご当地巡り等の話など、読者と交流しています。

「チェッコリ」とは韓国語で、本を一冊勉強し終わった後、皆でする打ち上げという意味ですが、その言葉どおりの楽しい日韓交流の空間となっています。

* 1966（昭和44）年、韓国全羅南道生まれ。1991（平成3）年日本に留学、大学卒業後、広告代理店勤務を経て、2007年に出版社クオン設立。

韓国ドラマがきっかけ

私は50歳過ぎまで一般企業で働いていました。2003年頃から「冬のソナタ」等、韓国ドラマや映画が日本で流行し、私自身も韓国ドラマにはまり、韓国を訪れ好きになり、韓国語も学んでいました。そして、仕事で知り合った店主の金から声をかけられたことをきっかけに、これからの人生は本当に打ち込めることに取組みたいとチェッコリに関わるようになったのです。

好きだから繋がる

ドラマ、KPOP、グルメ、ファッション等の韓国ブーム



カフェの様子。韓国の作家やアーティスト、ドラマ・映画、歴史、言語、食の専門家らを招いたトークイベントを開催。(コロナ禍の現在、カフェは休止、イベントはオンラインで実施)

は、今、第4次が到来していると言われています。特に韓国文学が読まれています。日本でも『82年生まれ、キム・ジヨン』**は23万部も売れました。また、このところ、日本の若い人たちがKPOPアイドルへの関心から韓国語を学び、そのアイドルが話題にする詩や小説を読み始め、人気を得ています。

きっかけは何であれ関心を持ったことから韓国の文化を知ろうとする若い人たちが接し、二つの国の懸け橋となるチェッコリを大切にしていきたいと思っています。



右上写真 金承福さん。今年発刊した『千代田区女性史(1996～2020)』に金承福さんの聞き書き「喜びや悲しみを噛みしめる時間を大切に、本と関わる」が掲載されています(p.207～212)。



MIW との関わり

国際女性デー2022 MIW 講座のオリジナルカード。神保町の書店に置いてもらいました。

▼講座「神保町でジェンダーを語ろう」の様子。右から、佐々木静代さん(チェッコリ)、寺島さやかさん(エトセトラブックス)、岩切ももさん(子どもの本専門店ブックハウスカフェ)。



神保町の書店と MIW

国際女性デーのコラボ企画

今年3月、MIWでは「神保町でジェンダーを語ろう」と題して、神保町の書店にご協力頂き、国際女性デーに関連した本の展示とトークイベントを開催しました。3月8日にはMIW交流サロンで、チェッコリの佐々木静代さんをはじめ、若い読者を惹きつけているフェミニズム本の専門店店主寺島さやかさん、子どもの本の専門店の岩切ももさんに、女性のエンパワメントと書店の役割、ジェンダーやフェミニズムと本を巡ってお話し頂きました。

また、関連イベントとして神保町の書店に、MIWオリジナルのカード(左上写真)を置いて頂き、国際女性デーに関連する本を店内で展示して頂きました。性差別をなくし、女性が生きやすい社会を作るために世界中の女性たちに連帯を呼び掛けるシンボルである「ミモザ」の花が、神保町の街に広がりました。MIWと地域が結びついて実現した企画です。

**韓国で2016年に刊行された小説(チョナムジュ著、斎藤真理子訳)。キム・ジヨン(82年に韓国で生まれた女性に最も多い名前)の誕生から学生時代、受験、就職、結婚、育児までの半生を克明に回顧し、女性の人生にひそむ困難や差別が淡々と描かれ、韓国で136万部のベストセラーになりました。



「ちよだの女性が未来をつくる！ フューチャーセッション」 区長に企画提案を発表しました！

昨年度（令和3年度）、千代田区は、「ちよだの女性が未来をつくる！フューチャーセッション」（第1期）を初開催しました。公募30名の女性区民（年代、家庭、学校・仕事環境など多様な方々）が幅広く参加。4回のセッションを通じて、参加者同士がフラットに対話をし、関係性を構築、アイデアを引き出し、最終回（令和4年3月6日）には議論の成果としてチームごとに区長に企画提案を発表しました。その後、not ぼっち、No Borders ちよだは「公益財団法人まちみらい千代田」の千代田まちづくりサポート（令和4年度）助成グループとして活動中です。

■フューチャーセッションとは

参加者同士が対話を通じて未来に向けた「新たな関係性」と「新たなアイデア」を生み出し、協力して行動できる状況を作り出す場です。



チーム ブラッと縁側

各自の特技・スキルを
活かして
気軽にサポートできる＆
サポートを受けられる場を!!

チーム not ぼっち

孤独感がなく
ゆるやかに
つながれる社会

チーム ちよだウェルビーイング

無理や我慢なく
女性がライフワークを両立し
自己実現する社会の実現



ワークショップの様子



参加者の皆さん

チーム おいでよ!! ちよだの村

その人らしい
幸せな人生を歩む準備を
社会に出る前に
出来るようにする!!

チーム No Borders ちよだ

その場のつながりで
生まれる新しい価値を
大切に育てていくことが
できる環境構築

チーム La mairie de Chiyoda*

世代・言語・障害・
情報リテラシーのレベルに
かわからず必要な情報を
全員がタイムリーに
得られる

* フランス語で千代田区役所

令和4年度は参加対象を拡大して、在住・在勤・在学女性による「ちよだをつなげる女性30人」を7月から開催しており、全5回のセッション最終日（11月10日）には、各チームが今後のアクションや企画提案について発表します。

発表会の様子は、より多くの方にご覧いただけるように、公開開催・リアル動画配信を予定しています。発表会参加希望の方は、10月下旬以降、千代田区 HP をご覧ください。



第10回 MIW 祭り



9/30(金) 12:00~20:00 ▶ 10/1(土) 10:00 ~ 14:00
千代田区役所区民ホール・男女共同参画センター MIW

今回で 10 回目を迎える MIW 祭り。今年のテーマは、「色とりどりの幸せのカタチ」。ここには、多様な性のあり方、多様な価値観や生き方を尊重し合うことが幸せにつながるの思いが込められています。2日間、男子高校生の花いけLIVE、「ちがうことはすてきなこと」の世界を表現する演劇、初めての手話体験、ペットボトルアクセサリ作りやコーチング等々、様々な催しを楽しんだら「なるほど多様性って、こんなこと」と気付くかも。通常の開催は3年ぶりです。皆様のご参加をお待ちしています。

オープニングイベント

9/30(金) 12:00 ~ 区民ホール

■花いけ男子部による花いけ ^{ライブ} LIVE



正則学園高等学校花いけ男子部による作品



■男女共同参画川柳コンテスト 大賞発表

■ステージでの発表や体験、展示や動画、ブースでの活動紹介もたくさん
 今年は 18 の MIW の登録団体、8 つの区内高校や大学の団体、7 つの地域の企業や団体が参加します。

■クイズラリーで MIW オリジナルエコバックや景品をゲット！



MIW 祭り実行委員会のみなさん



メインイベント

9/30(金) 18:30 ~ 20:00 区民ホール

■演劇 りつとにじのたね



演劇集団 LGBTI 東京



7月に実施した子育て中の方のための「アキバ分室でみゅじろうを作ろう」ワークショップの様子

MIW カフェのご紹介

MIW では、テーマに関心のある方たちが気軽に話し交流する場として、MIW カフェを開催しています。皆様のご参加をお待ちしています。

❖今後の予定

LGBTQs のためのほのぼのスポット Rainbow

9月8日(木)、1月12日(木) とともに 14:00 ~ 16:00

しんぐるまざーずカフェ

11月19日(土) 14:00 ~ 15:30 *問い合わせは MIW へ

MIW 祭りでも
 水引でみゅじろうを作る
 ワークショップを開きます



MIW インフォメーション

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンラインに変更、もしくは、中止とさせていただく場合があります

MIW 講座

「都心で災害にあったら～ビジネス街・繁華街の地域防災を考える～」

日時：令和4年9月6日（火）

18:30～20:00

講師：守茂昭さん（一般社団法人都市防災研究所理事）

会場：千代田区役所4階会議室A・B

対象：申込順／在住・在勤・在学者を優先

申込みはMIWまで



▲守茂昭さん

MIW 講座

「子どもの心が危ない一面前 DV と児童虐待」

日時：令和4年11月17日（木）

19:00～20:30

講師：石本宗子さん（社会福祉士）

講座形式：オンライン講座（Zoom 使用）

対象：申込順／在住・在勤・在学者を優先

申込みは10月20日から、MIWまで



MIW 相談室

予約専用電話 03-5211-4316

夫婦やパートナー、家族との関係、人間関係、子育て、働き方、ハラスメント、DV、性暴力、犯罪被害、性自認・性的指向に関すること

等、困っていることがあったら、一人で悩まずご相談ください。予約制です。（在住、在勤、在学の方対象）

一般相談 月曜日・水曜日・木曜日・土曜日
10:30～15:30

火曜日・金曜日 16:30～20:30

法律相談 毎月第2火曜日 13:00～15:30（女性のみ）

LGBTs 相談 毎月第2・4木曜日 16:30～19:30



みなさまからの
MIW 通信への感想、
MIW へのご意見など
お待ちしております。

←メールはこちらから



ビデオサロン

「サンドラの週末」

解雇を言い渡されたサンドラ。解雇を免れる方法は16人の同僚のうち過半数が自らのボーナスを諦めること。サンドラは同僚たちを説得に回るが…。人と人の絆、人間の強さに、心を揺さぶられる物語。



▲ジャケット

日時：令和4年10月21日（金）

① 14:30～② 18:30～

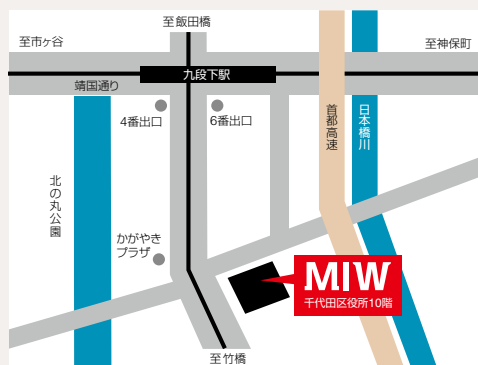
会場：MIW交流サロン（区役所10階）

定員：各回15名（申込順）

申込みは9月20日から、MIWまで

(C) Les Films du Fleuve - Archipel 35 - Bim Distribuzione - Eyeworks - RTBF

千代田区男女共同参画センター MIW (ミュウ)



所在地 〒102-8688 東京都千代田区九段南1-2-1 千代田区役所10階
交通機関 東京メトロ東西線、半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下」駅下車、徒歩5分
交通機関 開館時間 月曜日～金曜日 午前9時～午後9時 土曜日 午前9時～午後5時
休館日 日曜日、祝日、年末年始
TEL 03-5211-8845 / 相談予約受付 03-5211-4316 FAX 03-5211-8846
Eメール miw@city.chiyoda.tokyo.jp Facebook @chiyoda.miw
URL https://www.city.chiyoda.lg.jp (「暮らし・手続き」▶「男女平等・人権」▶男女共同参画センター MIW からお入りください)

編集後記

オンライン当たり前になってきた昨今。外出できなくても、遠くの人とつながれる良さはあるけれど、やはりリアルが良い。そこで今年はやりますよ！リアル MIW 祭り。10 回目のテーマは「色とりどりの幸せの形」(^^) 華やかに賑やかに、コロナに負けるな。みんな来てね～(f)



←MIW講座情報等をお送りします。メールマガジンの登録はこちらへ